

【編者略歴】

今川乱魚 (いまがわ・らんぎよ)

1935年東京生まれ。本名充。早稲田大学法学部卒。大阪で川柳を始める。999番傘川柳会会長。東葛川柳会最高顧問。東京みなど番傘川柳会元会長、番傘川柳本社幹事。(社)全日本川柳協会会長。日本川柳ペンクラブ常任理事。川柳人協会顧問。北國新聞、リハビリテーション川柳欄、川柳マガジン「笑いのある川柳」選者。千葉、東京で川柳講座講師。

第3回日本現代詩歌文学館館長賞、第9回川柳・大雄賞、第40回川柳文化賞受賞。

著書に『乱魚川柳句文集』、『ユーモア川柳乱魚句集』、『癒と闘う—ユーモア川柳乱魚句集』、『銭の音—ユーモア川柳乱魚句集』。編著に『科学大好き—ユーモア川柳乱魚選集』科学編・技術編・生活編、『三分間で詠んだ—ユーモア川柳乱魚選集』、『川柳贈る言葉』、『川柳ほほ笑み返し』。

(財)世界経済情報サービス勤務。

住 所：千葉県柏市逆井1167-4 (〒277-0042)

E-mail: rangyo@mug.biglobe.ne.jp

U R L: http://www2u.biglobe.ne.jp/~rangyo/

李琢玉川柳句集 酔牛

pp.127-133

○
2006年 8月 10日 初版

編 者

今 川 乱 魚

発行人

松 岡 恭 子

発行所

新 葉 館 出 版

大阪市東成区玉津1丁目9-16 4F 〒537-0023

TEL06-4259-3777 FAX06-4259-3888

http://shinyokan.ne.jp

印刷所

FREE PLAN

○
定価はカバーに表示してあります。

©Rangyo Imagawa Printed in Japan 2006

本書からの転載には出所を記してください。業務用の無断複製は禁じます。

ISBN4-86044-293-8

台湾を代言するポストコロニアル柳人

— 恩師李琢玉先生を偲ぶ —

黄 智慧

「あなたらしい川柳を作りなさい」と喝破する師匠・琢玉先生の鬼気迫る目が今でも頭から離れない。

大抵の新米は琢玉先生に川柳と俳句の違いから教わり始める。川柳は生臭い人事を詠む詩であり、人間味を謳歌する。そのため客観的な視点が必要である。一方、俳句は主観であり、主観的に自然を謳歌する。これが琢玉先生の持論の諧味、俳味の違いである。琢玉先生「自身もそれを鋭く見極め、両方を使いこなす、いわゆる二刀流である。その技は一方を深く知れば知るほど、もう一方もより深い境界に到達する」という稀な武技ではあるが、そうした感性と理性のダイナミズムの真髄を知る達人は、世の中にどれほどいるだろうか。

人事に精通している琢玉先生は、勿論門下生の性格をよく把握しており、句を見るやいなや、

誰の句かを察することができた。いつも「これは〇〇節だな」と愉快そうに読んでいた。先生の大前提は「小説は嘘をついてもいいが、川柳は絶対嘘をつかない」ということで、例えば若者が年寄りに成りすまして世の中の人事を批評したり、男が女の振りをして語るなど、少しでも嘘をつくと、琢玉先生から間違いなく雷が落ちたものだ。

逆に、上手ではなくても誠実で、その人の年齢、身分にふさわしい句であれば、才気が無くてもそれなりに先生に認められる。いつも真正面から自分を見つめて作品を磨き上げていくのが上達への唯一の道だと門下生を諭していた琢玉先生は、真実をこよなく愛する人であった。

一方、琢玉先生のもう一つの持ち技は自然に対する知識であり、俳句の本領を発揮する元でもあった。大百科事典並みの鳥や魚、あるいは植物などの知識に加え、食物、コーヒー、酒にいたるまで、話し始めると切りがないほど知識が湧き出てくる。

門下生は日本人と台湾人が半々だが、皆、琢玉先生の日本語の上手さに圧倒されていた。それは日本語の文法に対する精密さのみならず、「歩く字引き」としばしば称賛される通り、先生の話す日本語の内容に圧倒されたからであろう。先生のアマリの知識の豊富さに、学者も敬意を抱き、先生の専門を尋ねることもよくあったが、そのたびに「分類学だ」と答えていた。少々風変わりな専門分野ではあるが、真実を究極的に愛するがゆえに、全ての知識において徹底的に分類しようとしたからであろう。

さて、本人はあまり過去を語りたがらなかったが、ご尊父は台湾・桃園・大溪地方の高名な漢詩の詩人であった。話によれば十八歳の若さで台湾総督府の青年課に就職し、日本人同僚にチャンコロと蔑まれ喧嘩になった。その結果、日本人の同僚が異動になり、彼は罰されることなく済んだという。このようなことは台湾では珍しいケースであり、大抵の結果は逆であった。先生はその若さですでに自分の考えを堂々と表現することができ、周りからも一目置かれていたに違いない。そして、この仕事を続けることができたならば、総督府の中の精鋭となっていただろう。しかし突然の徴兵令により彼の人生は狂い始めた。彼は日本軍に入隊し、そして敗戦を迎えた。思いもかけず、日本は台湾から去っていった。

生涯を番狂わせの赤い紙

琢玉

はつきりと今でも浮かぶ敗戦日

琢玉

台湾を半端な国にした戦

琢玉

振り出しは敗戦受難台湾史

琢玉

結局、中華民国政府とその軍隊が台湾に進駐し、彼は「この国」中華民国を生きる羽目になった。

敗戦の責めを負わされ虐政史

琢玉

光復という逆戻りの統治

琢玉

半分は水増し中華民国史

琢玉

蔣曰く中華民国在台湾

琢玉

銅像に台湾人の無い不思議

琢玉

帰属感皆無青天白日旗

琢玉

だが、一庶民である彼のそれまでの経歴は使い物にならず、時局と対抗する手段も持たなかった。それでも、彼は生活の不便さを凌ぎ出世の道を犠牲にし、彼なりに精一杯抵抗した。

ペキン語を喋らぬ誓い半世紀

琢玉

あつしには関わりのねえ国中華

琢玉

そのような過酷な時代に対して真実を愛する詩人は心から憤慨しつつも、しっかりと時勢を見据えていた。

鮮血と涙で綴る台湾史

琢玉

シナ人に歪められてた台湾史

琢玉

四世紀の胸突き坂を台湾史

琢玉

そして一九八七年、ようやく戒嚴令が解かれ、台湾に民主化の時代がやってきた。

自分史に戒嚴という負のページ

琢玉

半生を縛られてきた戒嚴鎖

琢玉

あいまいな生き方戒嚴半世紀

琢玉

戒嚴の生傷癒えぬまま老いる

琢玉

半世紀かかって辿り着く自由

琢玉

李登輝の長い顔
台湾人の底力

琢玉

一票に台湾人の底力

琢玉

台湾はシナではないと大獅子吼

琢玉

人生の最晩年、先生は川柳に出会った。二重の植民統治を受け、台湾のポストコロニアル時代を生き抜いた同じ時代の人々の思いを、先生は代弁した。

一生に国籍三つとは悲情

琢玉

君が代も三民主義もヨソのクニ

琢玉

裏切りと使いつ切りの台湾史

琢玉

特に「嘗ての国」日本に対し、最高のポストコロニアル川柳を綴った。

ほろ苦い秋刀魚に過去のクニの味

琢玉

過ぎ去った国の旨さを握り寿司

琢玉

恩讐は御破算にして故侶日本

琢玉

ニッポンという愛憎に揺れるクニ

琢玉

選択の余地などは無い植民地

琢玉

日の丸の酸っぱさを知る植民地

琢玉

このような複雑極まる感情は、琢玉先生にとっても、論理的に分類できないものであろう。それを穿って表現できるのは川柳のみであった。川柳のそのような醍醐味を琢玉先生はしっかりと手に握り、私たちに手渡してくれたのだ。

(台湾中央研究院民族学研究所助手)